

〔その他〕

英語教育における文学作品の適用

香ノ木隆臣

An Application of Literature to English Education

Takaomi Konoki

周知のように、近年の高等教育における英語教育の実践の場で、文学作品がその素材とされる機会は減少の一途を辿り、代わって時事英語教材が中心に扱われ、あわせて英会話力の涵養の強調という要素も強調されるようになっていっている。筆者は、講読の講義での教材には、いわゆる“authentic material”とされる新聞や雑誌の記事を、主にインターネットから入手したうえで、語句の改変などの手を加えずにそのまま用いている。だがそればかりではなく、すぐれた文学作品が提示しうる人間像を考察する機会を学生に提供することで、単なる英文の読解を超えて、登場人物像の心情の解釈、作品の成立した時代背景などへ学生の考えを広げ、ある単語や語句についての見方・考え方を深めることを意図している。担当している講義「英語Ⅰ（講読）」にて平成12年度に、20世紀アメリカ女流作家ユードラ・ウェルティの初期短篇「おもいで」を扱った。この短篇は1937年秋までには完成していた作品で、短篇集『緑のカーテン』に所収となっている。

作者ウェルティは、初の短篇「訪問販売人の死」を1936年に執筆したときの心境を、『「訪問販売人の死」を書くことで私の目は見開かれ、自分にとってほんとうの主題、すなわち人間関係ということに衝撃を受けた¹⁾と後年になって述懐している。また、彼女の同時代作家であり批評家でもあったロバート・ペン・ウォーレンは『緑のカーテン』の主題を「愛と別離」と指摘し²⁾、ウェルティ自身もそれを肯定する発言をしている³⁾。ここで考察する「おもいで」という短篇には、「人間関係」と「愛と別離」が特異な結びつきをみせて展開されている。

この作品は、決して平易とはいえない文章ではあるも

の、決定版短篇集で5頁余程度の分量であり、註解を付すなどの教師側の努力で、高等学校までの基礎学力を前提とした、大学教養課程の教材として用いることができよう。ウェルティは短篇の名手として夙に令名が高く、「おもいで」もその短い分量のなかに、主人公の内的成長という重いテーマを扱いつつも「教訓的」にならず、ストーリー性があるうえ、詩的な表現に富んだ美しい文体も見逃せない。また、講義時には、正確な読解のほか、ウェルティ独特の比喩表現のおもしろさ、場面のシンボリズムは作品の主題につながるという、文学での了解事項を強調した。

まず、冒頭のパラグラフには、様々なモチーフが凝縮されていることに注目をうながした。

子どもだったころのある夏の朝、私は公園のなかの小さな湖で泳いだあと、砂浜で横になったのだった。太陽は照りつけていた——そろそろ正午になろうかという時間だった。湖水は鋼のように輝き、遠くで泳いでいる人の後ろにできる羽毛のようなさざなみの他には、何の動きもなかった。私が横になっていたところからは、まぶしく輝き、ほんとうに私を睨みつけているような、四角く区切られた景色を見ていた。太陽、砂浜、湖水、小さな休憩所、じっと動かない姿勢でいるわずかな数の孤独な人々、こうしたすべてを、丸くなった黒いオークの木々が、聖書の挿絵に彫りこまれた雷雲が取り囲んでいるように縁取りをしていた。私は絵を描くレッスンを受け始めてからは、いつも自分の指でつくった小さな枠をとおして、すべてを眺めていたのだった⁴⁾。

一人称の視点から語られるこの物語の主人公「私」は、この後に判明するように女性であり、子どもの頃を回想している記述から、ある程度の年齢には成長していることが読みとれよう。つまり、現在の大人の「私」が語り手となって、過去の「私」の心の機微を辿り直すという語りの構図が、作品全体を支配していることを示した。

冒頭における公園の情景の描写には、単に公園そのものを映し出しているだけにとどまらず、楽園としてのアメリカという普遍的イメージを喚起するはたらきがある。歴史家レオ・マークスによる古典的定義をみてみれば、「ジェファソンの時代から始まって、アメリカ人の抱いてきた願望は、田園的な風景のイメージ、つまり大陸的規模に拡大された、手入れの行き届いた緑の楽園のイメージを指向してきたのである。」⁵⁾「おもいで」の公園の描写に用いられている表現を調べれば、この場は時の支配を受けない閉鎖的空間であるという、過去における語り手の認識が強調されていることが判明する。そのため、“steel”“motionless”“rectangle”“fixed”“border”“engraved”“frames”といった単語の意味深さを学生に問いかけていった。

「この年の夏のあいだずっと、小さな湖のそばの砂浜で横になり」、「人生の秘密はほとんど啓示されたようなもの」(75)だと信じていた少女が何よりも大切にしていたのは、同じクラスの少年に対する恋であった。この少年と学校の階段で偶然に手が触れ合ったことで恋心を抱くようになっただけに、「この少年とは実際のところは友達ではなく」、「言葉を交したこともなければ、顔を見て挨拶をしたことすらなかった」(75)ような関係である。だが、たとえ一方的な恋愛であるにしても、彼女にとっては精神的昂揚を与える感情であった。少年との出逢いで生まれた感覚をたとえて、「突然の圧倒的な美しさで、[想いは]広がっていった。あたかも、大切な機会のために未熟なままで咲かされることになった薔薇のように。」(76)と彼女は表現している。この比喩から、恋愛から構築された彼女の内的世界の閉鎖された様子が暗示されていることに言及した。

「自己充足的小世界」に生きていた語り手には、時間意識が決定的に欠けており、成熟への拒否と考えられる場面が表れることを指摘した。少年が教室で突然に鼻血を出した光景を、「途方もない衝撃」と感じた彼女が失

神してしまうエピソード、あるいは、楽園としてのアメリカの縮図となっている公園で語り手が少年を想うとき、「ぼんやりとふくれあがった、時のないような(“timeless”)」感覚をおぼえ、「私は今でもどちらの方が現実に近いのかを言うつもりはない——思うままに咲かせられた夢と、泳いでいる人たちがいる景色と。」(77)という彼女の現実感の喪失を示す端的な表現を強調した。

語り手が自己の無垢なヴィジョンの織りなす小世界にいつまでも耽溺することは許されなかった。水辺で戯れる人たちを遠くに見やりながら少年への想いをふくらませる彼女の前に、奇妙な一団が、突如、現れ出てくる場面がある。

水浴びするその人たちが、どうやってここへ、これほど私の近くまでやってきたのか、気づかなかった。おそらくはほんとうに眠ってしまっていたのだろう。ともかく、私が横になっていた側に姿を現し、寝そべっていたのは、騒々しくのたうちまわる、お互いに似つかわしくない人の集まりだった。この上なく混乱した偶然で寄せ集められ、ばかげた考えに突き動かされてお互いに罵り合っているようだった。そんなことを彼らは大はしゃぎしながら楽しんでいて、私の心はひどく驚かされてしまった。男が一人、女が二人、男の子が二人いて、皮膚の色は褐色でざらっとした感じだったが、よその国の人ではなかった。私が子どもだった当時、こういう人は「下品」と言われていたのだが、この人たちは古くなって色褪せた水着を着てはいたが、彼らの肉体のもつ活力や疲労を隠すどころか、ありのままにさらしていた。(77)

想像すらしなかった闖入者の一群に、激しい嫌悪と当惑が交錯する語り手の心理が、綿々と綴られてゆく。語り手にとって、彼らの存在はいかようにも理解しがたく、またそうするつもりも皆無であったこと、とはいえ、彼らは単なる騒々しい集団を超えたある重要な意味をプロットのなかで担っていることを、以下に紹介するような内容で言及した。

語り手は、指で粹をつくる仕草もせず、この五人を否定的な表現を交えて描き出している。彼らが水辺で興じているグロテスクな遊びは、性的なコノテーションを濃密に漂わせている。このことを明らかにするため、「こ

ほれそうなほど砂をいっぱいもった男が手をあげ、女が笑うと、男はその手を揺すって、水着のなかでふくれて垂れ下がった両方の乳房のあいだに注ぎ込むように砂を落としていった。茶色く形が崩れて砂はぶら下がり、それを見てみんなは笑っていた」(76)という部分を示した。語り手はこの太った女性を、「脂肪が二の腕から垂れ下がる様子は、丘の地すべりが食い止められているようだった。彼女が体を動かしてもしたら、すぐに彼女が自分自身の上に滑り落ちて、空恐ろしい塊になってしまうように思えた」(76)とも描写していて、突然に自分を襲った当惑や恐怖が繰り返し強調されていることが読み取れるだろう。その激しさは、男が女の胸元に砂を入れている遊びの最中に、「私を見ることさえしたのだ。私をその視線のなかに入れた。驚いて振り向いた私は、彼らみんなが死んでしまえばいいと思った」(78)というほどである。

語り手は今まで自分が築いてきた少年への恋という静けさのなかに逃避しようとする。目を閉じて彼の面影を探す彼女の心にはしかし、「いつもあの記憶とともに現れるあまやかさのずっしりとした重み」(78)は訪れず、再び水辺を見たとき、自分のすべてが否定されるかのような光景に直面させられるクライマックスに指導の重点を置いた。

いちど顔を上げてみると、あの太った女が笑っている男の反対側に立っていた。彼女は前かがみになって、腰をかがめて水着の前を引き下げ、外側にめくった。するとぐちゃぐちゃに固まった砂が残らず下に落ちていった。私の恐怖は最高潮に達した——まるで彼女のふたつの乳房が砂になってしまったように感じられ、彼女は胸などまったく意味のあるものとは思っておらず、気にもとめていないかのようなだった。(79)

語り手にとって、この女性の行動が悪夢そのものの光景と感じられたのは、彼女自身が胸の象徴性をよく意識していたからこそ、尋常ならざる衝撃を受けたのである。彼女はこの女性の胸の大きさをきわめて醜悪なイメージでとらえていたのは、成熟の拒否の表れとも解釈できることを示唆した。彼女が望んでいた「人生の秘密」の啓示は、砂のように崩れ落ちる乳房という悪夢によっても

たらされたのである。その光景は、語り手が築いてきた静謐な世界、すなわち「粹」に象徴される、自己の絶対的価値観の崩壊を彼女自身にまざまざと思い知らせたのである。とはいえ、それは否定的な転機ではなく、成熟という不可逆の時間の存在を、彼女が直覚的に認識しえたことをこのシーンは明示している。

交錯した意識を映す最後のパラグラフでは、先の引用で示した事件が、語り手の「無垢な」時を終わらせたという筆者の解釈に関心を向けさせた。

あれが水辺での最後の朝となった。あの場に横になって、手で視界を四角く区切って、この先、冬になって学校に戻るときのことを私は考えようとしていた。私が愛する少年が教室へ入って来るのが想像できるようだった。よみがえった夢とともに水辺にいるこのとき、私は少年のことを見つめている。彼が見つめかえすときのことすら、想像できるようだった。が、何も言わず私に気づくこともない、金色の髪の普通くらいの背丈の少年、その瞳は私を意識することもなく、私の向こう、窓の外を見ている。孤独で誰にも守られずに。(80)

最後の一節からは、内的世界の終焉と同時に、「粹」の変奏である「窓」が象徴する、さらに広い外側の世界の存在が暗示されてもいる。ここに、語り手の精神は、苦痛にみちた通過儀礼というべき幻視を経て、再生・成長することが読者に感得されるだろう。言うなれば、この短篇は、主人公の精神的遍歴・成長を描く壮大な「教養小説」(“Bildungsroman”)が凝縮されたというべき作品となっていることを強調した。加えて、「おもいで」が「イノセンスからエクスペリエンスへ」という図式的解釈を免れながらも、いたずらに感傷に堕していないのは、後年になってからの語り手が一連の出来事を冷静に描ききっているなかに、「今でさえも“even now”」という語句を重要な場面に用いることにより、ノスタルジックな視点をさり気なく介在させて、過去と現在の距離に微妙な均衡を与えているからである。

これまで考察してきたプロットを参考にしつつ、学生に対して、「『砂が落ちたさまを胸が崩れ落ちていったように錯覚した』情景が主人公の意識の変遷にもたらした意味について論じること」という趣旨の課題を与えた。

単に字義的な読解に加えて、登場人物や場面の象徴性に富む作品の意味深さを理解しての、課題達成を求めた。表面的なプロットを追っただけにとどまった解答も散見されたのは残念であったが、「おもしろかった」「楽しかった」「悲しかった」「つまらなかった」といった単なる印象だけで作品をとらえるのではなく、作品の背後には作者の意識、時代的背景などの要素が潜んでおり、その理解が、読解作業を超えた英語への関心をひきだすことにつながると筆者は考えている。芸術作品は氷山の一角のような状態で成り立っていることを感得させること、つまり自分のなかに喚起された感情を皮相的にとらえないという姿勢が、この短篇を実際に解釈した学生のなかに養われることを、講義の最終的な目標としていたのである。

引用文献

- 1) Eudora Welty : One Writer's Beginnings, 87, Harvard University Press, 1984.
- 2) Robert Penn Warren : Selected Essays, 86, Random House, 1954.
- 3) Peggy Whitman Prenshaw ed. : Conversations with Eudora Welty, 190, University Press of Mississippi, 1984.
- 4) Eudora Welty : The Collected Stories of Eudora Welty, 75, Harcourt Brace Jovanovich, 1980. 以下、この作品からの引用は本文中の括弧内に頁数のみを示す。
- 5) Leo Marx : The Machine in the Garden : Technology and the Pastoral Ideal in America, 141, Oxford University Press, 1964. 引用は榊原胖夫、明石紀雄訳による。

(受稿日 平成14年2月26日)